

私に良くしてくださる方

詩篇 13 篇 1-6 節

はじめに

毎月第四週の説教は、旧約聖書の「詩篇」からお話することになっています。今日は、詩篇 13 篇から学びたいと思います。この詩は、「**ダビデの賛歌**」とあります。短い詩でありませんが、ダビデの苦難の中での「嘆き」と「祈り」、そして神様への「信頼」が歌われています。

1. ダビデの嘆き

まず 1-2 節を見てみましょう。「**主よ、いつまでですか。あなたは私を永久にお忘れになるのですか。いつまで、私は自分のたましいのうちで、思い悩まなければならないのでしょうか。私の心には、一日中、悲しみがあります。いつまで、敵が私の上におごり高ぶるのですか。**」

ダビデは苦難の中で、「主よ、いつまでですか」と神様に問いかけています。ダビデが信じる神様は、「主」と呼ばれるイスラエルの神です。聖書全体は、この「主」と呼ばれる神様こそ、唯一の真の神であると教えています。この「主」と呼ばれる神様以外、すべての神々は偽りであり、偶像であると教えています。日本には、八百万の神がいると言われ、どの神様を信じても良いと考えられています。しかし聖書は、神様はただひとりしかおられない、そのただひとりの神様は、「主」と呼ばれる方であると教えています。そして、私たちクリスチャンは、イエス様こそ「主」と呼ばれる真の神様であると信じているのです。

ダビデは、この詩を書いた時、苦難の中にありました。2 節を見ると、彼は「思い悩んでいた」のです。また「一日中、悲しみがあった」のです。具体的にどのような苦難であったのかは分かりません。この詩には、「敵」「逆らう者」という言葉が出てくるので、ある人は、ダビデはサウル王に命を狙われている時にこの詩を書いたのではないかと考えます。またある人は、3 節に「死の眠りにつかないように」と書かれているので、ダビデは重い病気の時にこの詩を書いたのではないかと考えます。いずれにしてもダビデは、死を考えなければならないほどの苦難の中で、思い悩み、一日中、悲しんでいたのです。

1-2 節で特徴的なのは、「いつまで」という言葉が四回も出てくることです。このことから分かることは、ダビデの苦難は長く続いているということです。決して一日二日のことではなく、一週間、一か月、あるいは一年、もしかしたら数年に及ぶ苦難であるかもしれません。彼は、長引く苦難の中で、思い悩み、一日中、悲しんでいるのです。出口の見えない苦難の中で、思わず「いつまで」という言葉を繰り返すのです。

私たちにも、「いつまで続くのか」と思うような苦しみや悲しみの経験があるかもしれません。一向に解決しない問題、一向に良くならない病気、一向に癒されない心の傷など、私たちの人生には長引く苦しみや悲しみ、悩みが、しばしばあります。

ダビデは、この長引く苦難の中で、「あなたは私を永久にお忘れになるのですか。「いつまで、御顔を私からお隠しになるのですか」と神様に訴えます。ダビデには、神様が自分のことを忘れてしまったかのように思えました。神様が自分のことを忘れてしまったから、このように苦難が長引いているのだと。またダビデには、神様が隠れてしまったと思えました。まるで隠れんぼをしているように、神様がダビデに見つからないように身を隠してしまったと思えました。

ここに「御顔」とありますが、神様は霊ですから、顔はありません。しかし聖書には、「御顔」という表現がよく出てきます。有名なのは、礼拝の祝祷の時でもよく祈る「**主が御顔をあなたに照らし、あなたを恵まれますように。主が御顔をあなたに向け、あなたに平安を与えられますように**」(民数記 6:25-26)という言葉です。神様の御顔が、私たちに向けられ、照らされる時、私たちに恵みと平安が与えられるのです。ですから、神様の御顔が隠されている時というのは、恵みと平安を感じられない時ということでしょう。ダビデは、そのような心境だったのでしょう。また「御顔を隠す」という表現は、聖書の中では、神様の「怒り」を表すこともあります。ダビデはこの時、神様が自分のことを怒っているから、苦難が長引いていると感じていたのかもしれませんが。

いずれにしてもダビデは、長引く苦難の中で、神様が自分のことを忘れてしまったのではないか、神様は自分のことを怒っているのではないか、神様は自分のことを避けているのではないか、神様は自分に無関心になってしまったのではないかと感じていたのです。ダビデは、「主」と呼ばれる神様を信じていました。その主なる神様は、全知全能の神でありますから、ダビデの苦難を知らないはずはないのです。その神様がいるにも拘らず、苦難が長引いているのはなぜか、神様が私を忘れたのか、怒っているのか、避けているのか、それとも無関心になってしまったのか、そのような思いが頭の中をぐるぐると回って思い悩み、悲しみに暮れていたのです。

2. ダビデの祈り

3-4 節を見てみましょう。「**私に目を注ぎ、私に教えてください。私の神、主よ。私の目を明るくしてください。私が死の眠りにつかないように。『彼に勝った』と、私の敵が言わないように。私がぐらつくことを、逆らう者が喜ばないように**」。

ここには、ダビデの祈りが歌われています。ダビデは、長引く苦難の中で、主なる神様に祈っているのです。たとえ神様が、私を忘れてしまったのではないか、怒っているのではないか、避けているのではないか、無関心になってしまったのではないかと思う中でも、ダビデは神様に語りかけること、求めること、祈ることを止めなかったのです。

ここでダビデは、六つの願いを神様に祈っています。最初の三つは「私に目を注いでく

ださい」「私に答えてください」「私の目を明るくしてください」という「～してください」という積極的な願いです。長引く苦難の中で、とにかくダビデが求めたのは、神様との交わり、神様との関係です。神様が「ウンともスンとも言ってくれない」状況が、ダビデには耐えがたいのです。ダビデはここで、「私の目を明るくしてください」と願っていますが、私たちは元気がない時は、目が暗くなります。元気な時は目が輝くのです。また目が暗いというのは、希望が見えないという状況かも知れません。目が明るいというのは、希望の光が見えるという状況かも知れません。ダビデはここで、自分との交わりを回復し、この出口の見えない暗闇の中で、一筋の希望の光を見せてくださいと祈っているのかもしれない。

後半の三つの願いは、「私が死の眠りにつかないように」「『彼に勝った』と、私の敵が言わないように」「私がぐらつくことを、逆らう者が喜ばないように」という「～しないように」という消極的な願いです。ここでは特に「敵」や「逆らう者」が出てきます。ここでの「敵」「逆らう者」とは、一体誰なのでしょう。ある人は、サウル王や敵国の王だと考えますが、私はもっと広く「サタン」と考えてもよいのではないかと思います。

サタンは、神様に敵対する存在です。そして私たち人間を誘惑し、私たちを神様から引き離そうとする存在です。人類最初の人であるアダムとエバも、このサタンに誘惑され、禁断の木の実を食べて、神様の命令に背きました。その結果、全人類に罪の性質がもたらされたと聖書は教えています。サタンは確かに存在します。人類に罪がある以上、サタンが存在することを、私たちは認めざるを得ません。神様が存在すると同じように、サタンもまた存在するのです。サタンは今もなお、私たちを神様から引き離そうとするのです。そして、私たちが「ぐらつくこと」を何よりも「喜んで」いるのです。私たちの神様に対する信仰が「ぐらつくこと」、揺らぐこと、それを喜び、私たちの信仰が揺らげば揺らぐほど、私たちに「勝った」と私たちに対して「おごり高ぶる」のです。ダビデは、そのような私たちの「敵」に打ち勝つためにも、「私に目を注いでください」「私に答えてください」「私の目を明るくしてください」と神様に祈っているのです。

3. **ダビデの信頼**

5-6節を見てみましょう。「**私はあなたの恵みに拠り頼みます。私の心はあなたの救いを喜びます。私は主に歌を歌います。主が私に良くしてくださいましたから。**」

ここでは、ダビデの神様への信頼が歌われています。長引く苦難の中で、ダビデは「あなたの恵みに拠り頼みます」「あなたの救いを喜びます」「主に歌を歌います」と歌います。ダビデの苦難は、決して解決したわけではありません。今なお苦難のただ中にいるのです。しかしダビデは、その中でも「拠り頼むこと」「喜ぶこと」「歌うこと」を止めなかったのです。

ダビデが拠り頼んだのは、「あなたの恵み」、つまり主なる神様の恵みです。「恵み」とは、一体何でしょうか。使徒パウロは、新約聖書のローマ4：4で、このように言ってい

ます。「働く者にとっては、報酬は恵みによるものではなく、当然支払われるべきものと見なされま
す」。ここでパウロは、「報酬」と「恵み」を対比させています。「恵み」は「報酬」と反対
の概念です。「報酬」は、働きに対する「報い」です。しかし「恵み」は、「報い」ではあ
りません。何の働きもない者が受けるものが「恵み」です。またパウロは、ローマ 11:6
で、こうも言っています。「**恵みによるのであれば、もはや行いによるものではありません。そうで
なければ、恵みが恵みでなくなります**」。ここでは、「行い」と「恵み」が対比されています。
何か良いことを行なって受けるのは、「恵み」ではありません。何も良いことを行なって
いないのに受けることが、「恵み」です。

ダビデは、長引く苦難の中で、神様の「恵み」に拠り頼み、信頼したのです。ダビデ
は、長引く苦難の中で頼りにしたのは、自分の行いではありませんでした。自分の働きで
もありませんでした。自分は神様に忠実に従ってきたとか、イスラエルの王として多くの
働きをしてきたとか、そういうものを頼りにしたわけではありませんでした。長引く苦難
の中では、それらは何の役にも立たないと分かっていたのでしょう。長引く苦難の中での
唯一の拠り所は、神様の「恵み」以外には何もないと思ったのでしょう。

ダビデはまた、「私の心はあなたの救いを喜びます」と歌います。ダビデはここで、「苦
難からの救い」ではなく、自分の「魂の救い」と言いますか、「罪からの救い」を喜んで
いるのです。聖書は、私たちは誰でも、イエス様こそ主なる神様あり、私たちの罪からの
救い主であると信じる時、すべての罪が赦され、救われ、天国に行けると教えています。
その意味での「救い」をダビデはここで喜んでいるのです。長引く苦難の中で、自分の魂
が救われていること、罪が赦され、天国に行けること、そのことを喜びとしているので
す。イエス様はある時、こう言われました。「**霊どもがあなたがたに服従することを喜ぶのでは
なく、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい**」(ルカ 10:20)。イエス様は、何
ができたとかできないとかを自分の喜びの基盤とするのではなく、あなたがたの名が天に
書き記されていること、つまり救われたことを、自分の喜びの基盤としなさいと教えてい
ます。長引く苦難の中でも、私たちは喜びを失うことはありません。それは、私たちがイ
エス様であって救われているからです。だからこそパウロは、こう言うのです。「**いつも主
にあって喜びなさい。もう一度言います。喜びなさい**」(ペリピ 4:4)。

おわりに

私たちは、長引く苦難の中で、何に拠り頼み、何を喜び、何を歌うべきなのでしょう
か。それは、「主が私に良くしてくださったこと」です。私が主に対してしたことではな
く、主が私に対してしてくださったことです。私が主に対してしたことには目を留めると、
私は大して悪いことをしてないのになぜ神様はこんな苦難に遭わせるのか、私は神様に忠
実に従ってきたのになぜ神様は早く苦難を終わらせてくださらないのか、と不平不満ばか
りが募ります。そうではなく、私たちは、自分がしたことではなく、神様が私にしてくだ
さったことに目を留めなければなりません。神様は、私たちを愛し、愛するひとり子のイ

イエスをこの世に遣わしてくださいました。またイエスは、私たちの罪のために十字架に架かり、私たちの罪をすべて償ってくださいました。これが、「主が私に良くしてくださったこと」であり、「神様の恵み」であり、「神様の救い」です。

これこそが、長引く苦難の中で、私たちが拠り頼むべきものです。なぜそうなのでしょう。パウロはこう言っています。「**私たちすべてのために、ご自分の御子さえも惜しむことなく死に渡された神が、どうして、御子とともにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがあるでしょうか**」(ローマ 8:32)。神様は、私たちの愛するひとり子を与えてくださったのです。その神様が、私たちの苦難に対して何もしてくださらないはずはないのです。イエスは、私たちの罪のためにご自身の命を与えてくださいました。そのイエスが、私たちの苦難に無関心であるはずはないのです。

またパウロはこうも言っています。「**だれが、私たちがキリストの愛から引き離すのですか。苦難ですか、苦悩ですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。…私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちが引き離すことはできません**」(ローマ 8:39)。苦難や苦悩は、私たちが神様の愛、イエスの愛から引き離す理由にはなりません。苦難の中でも、神様の愛、イエスの愛は、確かに私たちに注がれているのです。

詩篇 13 篇は、「いつまでですか」と問いたくなるような長引く苦難の中で、私たちがどのように歩めばよいのかを教えてくれる詩です。私たちは、長引く苦難の中で、「神様が私に良くしてくださったこと」に目を留め、それに拠り頼み、それを喜び、それを賛美していく時、「ゆらぐこと」なく、暗闇の中でも希望の光を見出していくことができます。愛するひとり子を与えてくださった神様が、またご自身の命を与えてくださったイエスが、私たちが忘れ、私たちの苦難に無関心でいることなどあり得ないからです。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちの人生にはしばしば、「いつまでですか」と問いたくなるような耐え難い苦難が襲ってきます。そのような中で、私たちはあなたへの信仰が揺らぎ、悲しみと思い悩みが私たちの心を支配します。どうか私たちが、長引く苦難の中でもあなたに祈ることを止めないことができますように。また「あなたが私に良くしてくださったこと」から目を離さずにいることができますように。どうかあなたの恵みに拠り頼み、あなたの救いを喜び、あなたへの讃美を止めることがありませんように。どうか、今、苦難のただ中にいる者たちに目を注ぎ、祈りに答え、目を明るくして、暗闇の中に一筋の希望の光を与えてください。この祈りを、私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。